

「2017年愛知県農業総合試験場10大成果」の概要

順位	課題名	概要
1	華麗な花びら「かがり弁」の輪ぎく新品種を開発 (共同研究)	花きの新たな需要開拓を目指して新奇性の高い品種の育成に取り組みました。イオンビーム照射を利用した育種技術により、花びらの先に複数の突起がある「かがり弁」をもつ白色種、赤紫色種、黄色種の3品種を開発しました。花びらに華やかなイメージがあり、祝い事やフラワーアレンジメントへの利用が期待できます。 (平成29年11月24日(金)記者発表済み)
2	名古屋コーチンの肉用新系統「NGY7」を開発	近親交配で能力が低下した名古屋コーチンの肉用系統「NGY3」の後継として、新系統を開発しました。平成16年から開始した育種改良の結果、成鶏時の体重が約10%以上増加し、生存率も改善した名古屋コーチン肉用新系統「NGY7」を開発しました。 (平成29年2月17日(金)記者発表済み)
3	植物成長調整剤によるコチヨウランの品質向上技術を開発 (農水省委託プロジェクト研究)	コチヨウランの高品質化を目指し、植物成長調整剤であるGA(ジベレリン)散布による花茎伸長とBA(ベンジルアデニン)散布による花数増加技術を開発しました。比較的簡易に品質向上が図られるため、生産者の所得向上に寄与できます。今後、両剤の農薬登録を目指します。
4	病気に強い水稻New「ミネアサヒ」を開発	本県の中山間地域で栽培され、食味が優れるブランド米「ミネアサヒ」に、交雑によるいもち病とイネ縮葉枯病抵抗性の導入を行いました。その結果、栽培特性や収量性、食味などは「ミネアサヒ」と同等で、病気への抵抗性のみが付与された新たな「ミネアサヒ」を開発しました。 (平成29年3月23日(金)記者発表済み)
5	くくり罠補助具「からまる棒」を開発 (共同研究)	杭を使って固定することで、立ち木の無い農地にもくくり罠が設置できるくくり罠補助具「からまる棒」を開発しました。くくり罠に捕まったシカは、ロープが「からまる棒」に巻き付くことで身動きが取れなくなるため、安全・迅速に殺処分ができ、害獣の捕獲に不慣れた農業者でも容易に捕獲作業を行うことが可能となります。
6	カットやスライス用に適したトマト「サンドパル」の特性を活かす栽培技術を開発	「サンドパル」は、カットやスライスに適し、着果促進処理が不要な単為結果性のトマトです(平成26年開発)。この「サンドパル」を、栽植密度200株/a程度とし、第1花房開花前のやや若苗で定植、1花房当たりの花数を4個までに制限することで、200g程度の果実を安定生産できることを明らかにしました。
7	小麦「きぬあかり」の生育予測技術を開発	本県で主に栽培されている小麦「きぬあかり」の生育予測手法として、発育指数(DVI)を用いた出穂期予測技術と極端な気象条件においてDVIを補完できる幼穂長を用いた出穂期予測技術を確立しました。さらに、出穂期からの「日平均気温-7°C」の有効積算温度を用いた成熟期予測技術も確立しました。これらの技術を用いた出穂期及び成熟期予測により、病害の適期防除や適期収穫の指導に利用できます。
8	ファージ添加により微生物の病害抑制効果が向上 (共同研究、農水省農食研究推進事業)	キャベツやブロッコリーなどのアブラナ科野菜の黒腐病の抑制に効果がある微生物に、病原菌を溶かすウイルス(ファージ)を添加することで、化学農薬である銅剤と同程度にまで抑制効果が向上することを明らかにしました。これにより、効果的で他の生物に影響の少ない黒腐病防除技術を実用化することが可能となります。
9	たまり粕を利用した敷料向け堆肥生産技術を開発	近年、オガクズの供給量が不足しているため、家畜の敷料の代替として自家生産が可能な堆肥の利用が検討されています。そこで、堆肥の発酵を促進する油脂と窒素を豊富に含んでいる「たまり粕」を添加することで、敷料として利用できる低水分(水分50%未満)の堆肥を生産できる技術を開発しました。
10	農業水路に転落したカエルの脱出ネットを開発	水田は生物多様性に富んでいるが、その周りにあるコンクリート水路は、カエル類などの小動物が転落すると脱出が難しく、生態系への悪影響が懸念されています。そこで、農業用の水路に転落したカエル類が水路外に逃げるための脱出ネットを開発しました。簡易な装置で設置も容易なため、地域で手軽に取り組むことができます。

それぞれの成果の詳細は、農業総合試験場のWebページで御覧いただけます。